

英語教科論

英語部

1 教科等の本質

平成29年度告示の学習指導要領の中で、外国語科の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」とある。外国語科の目標の中心となる部分は、「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」を育成することであり、中学校段階では、子どもが既得の知識・技能を活用して外国語を駆使しながら、様々な相手と情報や考えなどを伝え合い、コミュニケーションを図ることが重要であると考ええる。

研究全体論にもあるように、子どもがエージェンシーを発揮しながら学習に取り組む場面では、目的に向かって子どもが「伝えたいこと」をもち、外国語を駆使して試行錯誤しながら主体的にコミュニケーションを図り、異文化や他者を理解しようとする姿が見られるだろう。エージェンシーを発揮する姿は、「自分の目標や課題を設定し、達成に向けて試行錯誤しながら学ぶ姿」と考える。ここでの「目的」は、狩野(2017)の言うように、意味のある、伝える必然性のあるコミュニケーションの場面を設定したい。このような「目的・場面・状況」を設定することで、子どもは、興味・関心に応じて「これを伝えたい」という思いや内容を持ち、目標を立て、何とか英語で伝えたいと試行錯誤する中で、コミュニケーションの楽しさを実感しながら課題解決の過程を辿るだろう。このようなことから、中学校段階では、英語科の教科の本質を「英語を通じて、多様な文化や価値観を理解し、他者とよりよくコミュニケーションを図ること」とした。

次に、その教科の本質を踏まえ、本校の研究主題である「well-beingにつながる学び」を実現していくために、外国語におけるコミュニケーションや手立てについて考えていく。

外国語によるコミュニケーションは、Canale(1983)によるコミュニケーション能力を次の4つの構成要素からなると捉える考え方が広く知られている。①文法的能力(音声・語彙・文法などの能力)、②談話能力(文と文のつながり、会話の流れに関する能力)、③方略的能力(伝わらない時の補完や回避手段の能力や言い換える能力)、④社会言語的能力(場面や相手に応じた言語使用の能力)である。Savignon(1983)は、「コミュニケーション能力は相互作用的で動的である」と述べており、学習が進むにつれて4つの能力の比重や相互関係が変化していくと捉えられる。清水(2018)は、そのコミュニケーション能力のモデルを松川・大城(2008)の日本の外国語教育に当てはめたモデルを基に、「逆ピラミッド型」で示している。これによると、中学校の段階では、①から④の4つの能力全てに配慮しつつ、特に、②談話能力(主張と理由の流れなど)と③方略的能力(簡単な言葉で言い換える力)を強調する必要がある。また、話す際には「内容・表現・伝え方」を意識し、この3つの観点から適切に発話できるように指導する必要がある。子どもがどんな内容を、どんな表現で、どう伝えるかを工夫して、何とか英語で伝えたいと試行錯誤する中でエージェンシーを発揮し、コミュニケーションの楽しさを実感しながら課題解決の過程を辿ることを大切にしたい。

「内容・表現・伝え方」については、完全に対応するわけではないが、次のLevelt(1989)のmodel of language productionの考え方が参考になる。Conceptualizer(何を言うかを考える段階=アイデア・内容の選択、順序の整理)、Formulator(考えた内容を言語形式に変える段階=文法や語彙を選び、表現を作る)、Articulator(どう声に出すか、非言語的にどう伝えるか)、Monitor(自分の言葉を聞き直して修正する)。

これらのLeveltのモデルを参考に、「内容、表現、伝え方」という観点で整理した。

内容	自分も相手も興味ある面白い内容/話題、順序(何を言うか) <言語的>
表現	適切な表現/言語形式(どんな言葉や表現で言うか) <言語的>
伝え方	場面や相手に応じたよりよい伝え方(どう伝えるか) ・Eye contact, Clear voice, Smile, Gesture, Reaction <非言語的> ・言い換え(語を知らない時、説明的に言い換える)、単純化(簡単な語句や文で言う)、代用(アジをfishと種類で言うなど) <言語的>

まずは、子どもが「伝えたい」と思えるような必然性のある「目的・場面・状況」を設定し、「他者とよりよくコミュニケーションするためにはどうすればよいのか」という課題を設定する。子どもは、「どのようにすれば、他者とよりよくコミュニケーションできるか」を考え、自分の Goal（目標/問い）をもち、「内容・表現・伝え方」に着目して、よりよく解決・表現する方法を追究していく。その過程で、子どもは、自分も相手も興味のある面白い内容や、適切な表現、よりよい伝え方を工夫して、何とか伝えようと試行錯誤してエージェンシーを発揮しながら、自他の文化や多様な価値観、他者への理解を深め、他者とのつながりやコミュニケーションを図ることの楽しさを実感するだろう。

このように、子どもがエージェンシーを発揮しながら、自ら課題を発見し、よりよく解決・表現する方法を追究する過程が、well-beingにつながる学びの実現や「よりよい未来」を創る基盤である力の育成につながると考えた。

2 英語科での四つの学習活動

英語科では、四つの学習活動を整理したものが以下の表である。

ためし	○目的・場面・状況に応じて相手とコミュニケーションを図り実践する時間 ・既習表現や学習活動での気付きを意識して実際に試す。 ・相手に伝えたいこと（内容・表現・伝え方等）を工夫して伝え合う。
みがき	○課題解決のために、必要な知識・技能等を身に付ける時間 ・身に付ける必要がある学び（内容・表現・伝え方）について、準備や練習をする。
さぐり	○本質的な課題に対して、解決の方法を探り、自分の考えをもつ時間 ・必要な要素（学びや解決方法、理想の姿等）を考えて、探究する。 ・その場面での単語や表現の使い方等を、教科書等の例から学ぶ。
つなぎ	○それぞれの学習活動での気付きを共有し、協働的に学ぶ時間 ・気付きや分かったこと等を共有し、意見交流や合意形成を行う。 ・選択した学習活動について振り返り、次時の流れや新たな課題に繋げる。

教師が単元全体の到達目標や教科の本質に迫る問いを設定し、子どもは、達成や解決のために、必要な要素や解決の方法を考え、「My Goal」でどんな工夫で伝えるかを選ぶ。

子どもは、その目的・場面・状況で、「どのようにすれば、相手とよりよいコミュニケーションができるか」という本質的な課題を、「内容・表現・伝え方」に着目して捉え、解決するために四つの学習活動を選択しながら学習計画を立て、見通しをもつ。

「ためし」では、実際に伝え合い試してみる。既習の表現や知識・技能を駆使して「ためし」、「みがき」やその他の学びで身に付けた「内容、表現、伝え方」に関する知識・技能等を実践してみる。「みがき」では、課題解決のために、必要な要素（内容・表現・伝え方等）の準備や練習をして知識・技能等を身に付ける。「さぐり」では、その課題について、解決方法等を考え、自分の考えをもち追究していく。「つなぎ」では、Sharingなどで気づき等を共有して協働的に学び、解決方法や、学びの成果と課題、改善方法等について振り返り、次時の学習活動の選択や流れを決めたり、新たな課題へとつなげたりする活動となる。

これらの四つの学習活動は、単元全体を通して子どもが考えた学習計画を基に、各活動を実践してみて必要に応じた流れの中で柔軟に選択し決定していく。子どもは、エージェンシーを発揮しながら、自ら課題を発見し、よりよく解決・表現する方法を追究し、自己肯定感や関係性を高め、well-beingにつながる学びの実現や「よりよい未来」を創る基盤である力の育成につなげることが可能になるのではないかと考える。

3 引用・参考文献

- ・文部科学省(2017)「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編」
- ・文部科学省(2020)「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料」
- ・Canale(1983)“From communicative competence to communicative language pedagogy”
- ・Savignon(1983)“Communicative Competence:Theory and Classroom Practice”
- ・松川・大城(2008)「小学校外国語活動実践マニュアル」
- ・清水遥(2018)「関連領域から見る初等外国語教育」ミネルヴァ書房
- ・狩野明子(2017)「平成29年度版 新学習指導要領の展開 外国語活動編」明治図書
- ・Levelt(1989). Speaking:From Intention to Articulation. Cambridge,Press